

田辺と森田先生と私

平井正子

学生のころはもちろん、教師になってからも英文科の先生方は全部存じ上げていた。それでも年月がたつうちに、英文科でも専門分野を異にする先生方とは距離感が徐々に大きくなり、やがて水がすべて入れ替わるように、まったく新しい人たちがばかりになってしまう。そういうことをふと感じていた数年前、おやめになったアメリカ文学関係の先生のあとに新しい先生がいらっしゃるということを知った。それからしばらくしてその年の入試作成委員になり、委員長がその新しくいらした森田先生だった。一年間試験関係でお会いしているうちに、そろそろ忘れようとしていたあの昔の、文学に対する思いのようなものがよみがえってきた。私たちの若いころ、英文科の先生方は教育大学出身の方が多かった。それぞれに違うものをお持ちでいながら、ビギナーの私たちにとってはみな同じ、学問でもそれ以外の時間でも、折に触れご自分たちの経験された「象牙の塔」の雰囲気をお私たちに分け与えてくださって、それはいつの間にかまるで父母、さらに祖父母の住む「ふるさと」に対する共通の思いのようなものとなったのである。森田先生の周りにはそういう懐かしいオーラが漂っていた。

森田先生はご自分でも人見知りをするなどおっしゃる。少し顔を赤らめて、ちょっと斜めからご覧になり、そして不思議に軽やかに歩いていらっしゃる様子は、そのお立場では考えられないほど初々しいお姿である。し

かしながら、そういう方は往々にして情熱家で、人見知りといいながらこれと思ったものを、そして人を、絶対に逃さないのではないか、などと勝手な想像をしていた。だが、実際はどうか、私にはわからない。

「三段壁、自殺女が飛び込んだ」

私のふるさととは和歌山県の田辺市。禄高が三万五千石の小さな地方城下町、何もなければそう多くの人知っているという場所ではない。車で30分もかからないところには人ぞ知る温泉で有名な白浜がある。昔昔、家族で白浜に行ったとき、歌の好きな母が、私たちに「俳句を作ってごらん」という。五、七、五で読めばいいというので頭を絞った結果できた私の処女句がこれである。その後、小学校の低学年の時に、やはり宿題が出て、私の読んだ句が先生にほめられ、みんなの前で読まれた。

「やじ馬と入り乱れてや消防車」

それは困り果てた私を見て母が作ったものである。この有様だから、先生にいただいた貴重な短歌のご本はととてもとても〇〇に真珠である。歴史上の歌人の歌はいくつも私の前を通り過ぎた。しかし、多くの方はずっと昔からご存じだったので、私は残念ながら、存じ上げていなかった。洒脱な絵と短歌というものと、アメリカ文学の森田先生との結びつきは形而上詩人たちのコンシートの衝撃であった。そんなことを思っていたある日、「民俗学研究所ニュース 85号」に森田先生がお書きになったものが目に入った。それは「田辺と南方熊楠、わが原点」というエッセイであった。またまた森田先生と田辺の作り出す火花に引火してしまった。

今までも何人かの先生方にお話したことであるが、田辺も同じ中屋敷町に、私の育った家と、そして通りを一本隔てたところに今は顕彰館が隣に建っている南方熊楠の生家がある。その前の小さな通りは私たちの通学

の道でもあり、瓦を重ねた土塀の土を削りながら学校へ通ったものだった。ご進講であまりにも有名な神島は遠足の地、鬮鶏神社は月に一度の朝市の場。

もちろん私は熊楠を知らない。しかし、亡くなったときに母の義理の兄に当たる、当時阪大にいた森上修造医師が死後解剖を行ったというので、「お兄ちゃんが解剖したんだよ」と森上のおばあちゃんが母に言ったことや、父から聞いた「脳のしわが多かったようだ」という言葉だけが私の遠い記憶にしっかりと刻まれている。一昨年、90歳を前に母が自宅を改築した折には、那智の知人にいただいた天然記念物の、名前は分からないが大きなしだのような植物を、顕彰館に引き取っていただいた。熊楠の娘の文枝さんと母とは、単なるご近所の知り合いという関係でしかないが、何かにつけずねていらしておしゃべりしたり、熊楠の古い手紙を三笠宮様だけに差し上げるのに何を着ていけばいいかしらと相談を受けたなどということもあったようだ。熊楠が研究したというコケをしょった亀を、まだ顕彰館になって公のものとなる前に、「いつかお孫さんにみせてあげましょう」と言っていたというようなことを聞いたこともある。

コケは植物であるから、実際に熊楠が手に取ったそのものではなくても、代々受け継ぐごとくにそれ相応の季節には新しい芽が出、古いものは落ちていつの時代にも往年を偲ぶよすがとなっているのだろう。何年前か前、というよりもはっきりと1994年、桜の便りに誘われて京都に旅した折、高名な庭園で、それは見事は枝垂桜を拝見した。樹齢400年あまり、というから、ちょうどシェイクスピアと同じような年齢だと思いつつ、今にも地面につかんばかりに伸びて木杵で支えられた大枝を眺めていた。木の幹は古亀の甲羅のように貫禄のあるごわごわした表面であったが、葉は青々として見上げる空を覆っていた。遷都1200年を祝う京都はお祝いムードが満載であるものの、大変な人出と増える一方の排気ガスに、桜も息詰る

思いをしているに違いなく、それでも「今年の花と葉」を咲かせて訪れる人の目を楽しませていた。同じく遷都 1300 年を祝って公開された大徳寺の総見院で見た、秀吉がこよなく愛したという日本最古の胡蝶侘助も、年輪を加えてどっしりとした幹に、秀吉の目を楽しませたのと同じような紅白の花が今年も、来年も咲き続け、そのようなはかないものであるからかえって経てきた年月に思いをいたすことができるのかもしれない。しかし、文枝さんも亡くなり、亀もいるのかどうか…

大きな先輩の住んでいたこともそれほど意識せず、道草を食いながら通ったあの小さな通りに、憂いも心配も感じずに過ごしていた時代の大事なものがあつたのを思い出し、おそれ多くも森田先生との共通点をやっと思出したことに気がついたのである。

Parting is such a sweet sorrow. といったのはシェイクスピア。相前後して成城を去る同期の桜である森田先生、私も田辺は原点なのです。